

校長室だより

春日 (しゅんじつ)

校長 清武 直人

平和の種

一粒の種は一粒にあらず
一粒の種は十の花を咲かせ
十の花は百の種となる
私はそのよき種、平和の種をまく

6年生は、修学旅行の第1日目、長崎の原爆投下中心地に立ち、平和への誓いを立てました。

「私たちは、この世の中に、二度と戦争を起こさないことを誓います。」

「私たち一人一人の力は小さいけれど、力を合わせ、大きな力にします。」

「そして、自分でできることを見つけ、平和の種をまきます。」

胸を張り、凜とした表情で誓いを立てる6年生の姿を見て、胸が熱くなりました。すばらしい修学旅行のスタートです。

おけつるべの桶

移動中のバスの中で、永井博士のビデオを見せてもらいました。見慣れたビデオのはずだったのですが、テロップで流れる永井博士の言葉が目には焼き付きました。

放射線の研究で被爆し、余命3年と宣告されていた永井博士。そんな時、長崎に原爆が投下されます。医者である永井博士は、3日間寝ずに被爆者の治療に当たります。

3日目、自宅に戻ると、そこは見渡す限り焼け野原。一人自宅にいた妻の命も奪われてしまいました。

この悲しみの中にあって、永井博士はこう語ったのです。

つるべの桶は
空っぽにならなければ
井戸の底にある水を
くみ上げることはできない

新しい水をくむためには一度桶を空っぽにしなければならぬ。全てを失ったこの現状は、失望ではなく、希望であると語っているのです。

悲しみのどん底にあってこう語る永井博士に、畏敬の念を感じずにはいません。



お土産

お土産を買うのも修学旅行の楽しみの一つです。しかしながら、お土産を買う時間は短いのです。

「校長先生、ぼくの妹暗いところ怖がるからライトがついたこれにしようかと思うんですけど・・・。」

「校長先生、お父さんにお酒買っていいかと思うんですけど・・・。」

子どもたちの頭の中に、家族の顔が浮かびます。実に微笑ましい。ところが、

『春日小学校のみなさん、お時間があと5分となりました』

突然、土産物売りに放送が流れます。時間がない！

子どもたちは、財布を握りしめ、土産物の正札をにらみます。その時、また館内放送。

『春日小学校のみなさんの中で、お金だけ払って品物を持って行っていない人がいます。取りに来てください。』

** (*°Д°) **

ペーロン

ドラの鐘の音に合わせて船を漕ぎます。クラス対抗。勝負です。合い言葉は「勝っても負けてもさわやかに！」

旗が降ろされ、ドラが鳴ります。初めは冷静だった6年担任5人。いつの間にか必死で櫂(かい)をかいています。

レースが終わりました。子どもたちを集めて満生先生が言いました。

「目を閉じて。次、目を開けた時は、勝った方も負けた方もさわやかな顔でね。はい、目を開けて。」

心なしか、満生先生の顔が引きつって見えたのは気のせいかな・・・。

